

小 論

68年5月のころ

大 空 博

南ベトナムで解放戦線側の大攻勢が始まったのが、その年の1月である。31日未明、サイゴン中心部に潜入した決死隊は米大使館に突入、館内の一角を占領し、米海兵隊と6時間の銃撃戦を交えた。他の一隊はグエン・バン・チュー大統領の官邸・独立宮殿の正門を手榴弾で破壊、さらに国営放送局、海軍司令部、政府軍統合参謀本部、米軍将校宿舎、タンソニユット空港に迫撃砲やロケット砲弾を撃ちこんだ。旧王都フエやニャチャン、プレークーなど七つの省都、米軍最大のダナン基地への攻撃は、すでに2日前に始まっていた。旧正月（テト）に照準を合わせた作戦は「テト大攻勢」として記憶され、64年以降米軍の本格介入で激化していたベトナム戦争に一大転機をもたらす契機となる。

パリ「5月革命」の年 1968年はこうして明けた。

3月、ジョンソン米大統領は、北爆の部分停止と10月の大統領選挙への不出馬を表明、5月3日には、「北」の提案にたいし「ベトナム和平への予備会談を10日からパリで開催することを受諾する」と全世界に明らかにした。

*

当時、パリに滞在していた哲学者中村雄二郎は、随想「『5月革命』のなかで考えたこと」を『思想』68年9月号（岩波書店）に書き送っているが、「革命」が始まる前のパリは「まことに平和そのものの日々であった」とし、さらに次のように記している。

5月1日のメーデーには、14年ぶりにパリでデモ行進が許可され、5 - 10万の人々がレブユリックからバスチーユまで行進したが、パリ全体の町の表情から言えば、この日は「メーデーの日」というよりは「幸福の鈴蘭」の日であった。大通りはもとより、小さな街角に至るまで、あるいは手押し車をひき、あるいは簡単な台をしつらえて、農民のおかみさん風の人や少年たちが、鈴蘭を売っていた。のちに「パリケードの日々」にいわば主戦場となったゲイ・リュサック通りでも、サン・ミッシェル大通りでも。

白い花の香が漂うマロニエから鈴蘭へと季節が移り、やわらかな陽ざしに街がかすむ5月のパリは、私の記憶にもしっかりと刻まれている。新聞記者になり、5年目の66年10月から翌年10月まで、フランス政府の給費留学生（ジャーナリズム専攻）として過ごしたのがパリであった。そして、68年5月、私は東京に戻っていた。帰国後、所属の部署が地方部から外報部（現在・国際部と改称）に変わり、外国通信社が打電する英文を翻訳し、特派員がテレックスを用いローマ字表記で送稿する記事を日本語に移しかえる日々を送っていた。そんなとき「平和なパリ」に、一躍、脚光が当たるニュースが飛び込んできた。ジョンソン大統領の5月3日の声明である。

[ワシントン小川特派員3日発]ジョンソン米大統領は、3日午前10時（日本時間3日午後11時）、アメリカはベトナム和平への予備会談を5月10日からパリで開くことを受諾する旨のメッセージをハノイに送ったと声明した。この声明は、ハノイ放送が北ベトナム外務省の声明を発表した後の、同日午前10時から全米にテレビ中継された大統領の記者会見の冒頭に、大統領自身が読み上げたものである。（読売新聞 1968年5月4日 夕刊）

このニュースは1面トップ、「ベトナム和平予備会談 10日からパリで開催」という見出しで、横1段すべてぶち抜きの異例の扱いであった。小川特派員は記事のなかで、会談が「最初の接触」であり、和平への「第一歩に過ぎない」とするジョンソン大統領の慎重な姿勢をあわせて伝えていたが、アメリカの受諾で¹⁾ベトナム戦争終結への外交努力が、ようやくスタートラインに立つことになったことを全世界に示す、まぎれもない重大ニュースだった。

ジョンソン声明が世界中を駆けめぐった3日午後、パリの学生街カルチエ・ラタンでは学生と警官隊の衝突事件がおきていた。学生集会を禁止し、学園閉鎖に踏み切った大学当局への抗議デモが騒乱を引き起こしたのだ。「5月革命」の発端である。しかし、4日付日本の新聞は、朝日、読売新聞を見る限り、そのニュースを1行も載せていない。新聞はベトナム和平予備会談に目を奪われ、紙面大半のスペースを予備会談にかかわる記事で埋めていた。

いま、当時の新聞を読み直すと、5月7日の読売夕刊・2面トップに「平和へきびしい船出外交筋の見方」というパリ特派員電が掲載されている。その後に、「サイゴン空港再び砲撃解放戦線・周辺地でも戦闘」（サイゴン特派員電）が3段で続いている。南ベトナムでは、1月のテトに次ぐ攻勢が始まっていた。翌8日にも1面に「サイゴン最大の市街戦」（読売 3段）がある。明らかにパリ会談に照準を合わせた軍事作戦であった。これを朝日は、北ベトナムと解放戦線の、「血の戦い」（サイゴン攻勢）と“言葉の対決”（パリ会談）（5月11日朝刊）と表現し、和平会談の行方を握る重要な場所がパリだけでないことを示唆した。

5月3日にソルボンヌが閉鎖され、街頭で学生と警官隊が衝突にいたる事件のあと、あるいはその前に何がおきたのか。とりあえず以下に主な出来事を列挙する。4月27日には「5月革命」の指導者のひとり、コーン・ベンディット²⁾が逮捕され家宅捜査をうけていた。「5月革命」には予兆があり、5月3日の事件で突然火を噴いたわけではなかった。

5 月

- 2日 パリ大学ナンテールで学生が「反帝国主義」映画を上演する部屋を要求して学生部の部屋に乱入、学長がナンテール閉鎖を宣言
 - 3日 ナンテール閉鎖に抗議してUNEF（全学連）の代表らがソルボンヌで学生集会を開き、総長は退去を命令、夕方、学園閉鎖を宣言した。学園の周辺では投入された警官隊と学生が衝突、催涙弾と投石で近くのサン＝ミッシェルなど主要道路が交通マヒする
 - 6日 学生街でデモ隊側に460人、警官側に345人の負傷者（UPI通信社調べ）。人民戦線内閣の登場をうながしておきた1936年の衝突デモいらい最悪事態となる
 - 7日 学生デモは、右岸の目抜き通りシャンゼリゼに拡大、地方都市に波及
 - 10日 ベトナム和平予備会談始まる。カルチエ・ラタンでは5万人の学生がバリケードを築いて警官隊と対決。一方、ナンテールでは閉鎖が解かれた
 - 11日 バリケードをはさんでの“市街戦”は未明まで続く。共産党系の労働総同盟（CGT）とキリスト教系の民主労働総連合（CFDT）などが13日・24時間のゼネスト決定
 - 12日 ボンピドー首相が異例のテレビ放送。ソルボンヌの閉鎖を13日から解く 逮捕されている学生の釈放 入試制度の見直し を発表
 - 13日 ベトナム和平の正式会談開始。3大労組がフランス全土でゼネストに突入
 - 18日 ルーマニアを公式訪問中のドゴール大統領、予定を1日早めて帰国
 - 22日 フランス国民議会がボンピドー内閣不信任動議を否決。政府、3大労組と「話し合い」を表明
 - 24日 ドゴール大統領が7分間のテレビ演説、6月に国民投票実施を発表。街頭では演説に「ノン」の強い反発
 - 27日 事態收拾のために政、労、使の代表がグルネル協定を結ぶ（これを契機に事態の流れが変わる）
 - 30日 ドゴール大統領がラジオで仏国民に演説、6月に予定した国民投票は延期し、議会を解散、総選挙で民意を問うと述べ、左翼との対決姿勢を明確に
- *総選挙は6月に実施され、30日の第2回投票でドゴール派が圧勝、力の行使で事態沈静化へ

*

5月の事件は「抗議デモ」から「暴動」に、「暴動」から「反乱」に、そして「文化革命」へと変質していく。「新聞やラジオの表現を借りると」と断りながら事態の発展をそのように規定したのは、西川長夫教授（以下、敬称略）である。

当時、34歳。立命館大学の講師であった西川は、67年10月から69年10月までの2年間フランス側の招きでパリに留学、ソルボンヌ（パリ第4大学）とオートゼチュード（国立高等研究院）に籍をおいていた。そして、目前で展開する「さわぎ」を編集者あての手紙という形でまとめ月刊誌『展望』8月号（筑摩書房）に寄稿したのが、「パリ・1968年5月の記録」であった。この手記は、99年10月に刊行された『フランスの解体？ もうひとつの国民国家論』（人文書院）に全文再録されており、上記の「文化革命」にいたる状況変化の規定と下記の引用文は、「パリ・1968年5月の記録」の最初と次のページに見いだすことができる。

君は何がフランスの学生をこのような行動にかりたてているのか首をかしげざるをえないと書いているが、ぼくも5月3日午後、ラジオがカルチエ・ラタンの衝突を伝はじめたときは、学生とほぼ同数の多数の警察隊にたいして学生の抵抗が意外に強く激しく、そして長時間にわたること、それがきわめて自然発生的な特徴をそなえていることに驚きはしたものの、その行動の意味を解しかねた。ぼくだけでなく、ぼくのような外国人はもとより、ほとんどのフランス人がこの事件を晴天の霹靂としてうけとり、事件の性質にかんしてほとんど誤った判断を下していることは、いま当時の新聞をよみくらべてみても明らかだ。政府も政党も評論家も警察も、そして大学関係者もみな判断を誤った。事件の第一の原因は、みんなが判断を誤ったところにあると思う。つまり、フランスの新しい世代はそれほど社会から理解されていなかったのだ。（「パリ・1968年5月の記録」 第1信）

5月17日朝までに書き上げられた第1信は、そこに費やされた文字だけで約1万6000字、400字詰め原稿用紙でほぼ40枚に相当する長文だ。それだけで十分に、ひとつの「5月革命」序論になっている。はじめはとまどい、学生たちの「行動の意味を理解しかねた」西川が、2週間後には「フランスの新しい世代はそれほど社会から理解されていなかったのだ」と結論を下す考察の鋭さと的確さ この一節にであったとき、31年前に「5月革命」の日々を送った彼の姿がくっきりと立ち上がり、私は自らの体験と照らしあわせながらその手記全文を一気に読んだ。手記に用いられた小見出しを拾うと、「だれもが判断をあやまった」「発端から『市街戦』まで」「赤旗と黒旗の下で」「お祭り気分のなかで」「グルプスキュール」「共産党の態度」「想像力が権力を握った」とテーマは多岐にわたっている。彼自身、留学生としてソルボンヌに出入りし、集会・デモに参加した。その体験が克明に織り込まれていて、第1信は同時に当

時の状況を的確に描いたルポルタージュとなっている。

発端の説明が長くなってしまった。さっきまでブラタナスの並木で夜鳴鶯が鳴いていたと思ったら、窓の外はもう明るくなっている。パリの夏の夜は短い。10時近くまで日が暮れきらないのに、午前4時には夜が明けている。16日のソルボンヌの様子を大急ぎで書いて終わりにしよう。

午後3時からゲイ＝リュサック通りからサン＝ミッシェル通りに出る。ゲイ＝リュサックはあの劇的なバリケードの夜（10日よるから11日朝にかけて）、もっとも激しい衝突が行われたところだ。バリケードのあとはだいたいとりのけられ、敷石（パヴェ）がはがされた場所にも一時的な処置が施してある。だが焼けただれた車だけはそのまま道の両側に放置してある。数えてみるとサン＝ミッシェルにでるまで28台あった。（第1信 赤旗と黒旗の下で）

もう朝だ。すでに日は高く、通りを見下ろすとブラタナスの若葉が朝日をうけて美しい。とうとう夜を明かしてしまった。しかし、もし君が近くにいたらこんな時にはやはり一夜を語り明かすことになっただろう。これから一眠りしてまたソルボンヌの若者たちのあいだに出かけよう。さようなら。そちらの様子を知らせてほしい。（5月17日朝、第1信の最後の章「想像力が権力を奪った」の末尾の1節）

P・S 学生の運動はついに労働者のあいだに波及した。ルノーの工場労働者が賃上げと労働条件の改善を求めて工場を占拠、無期限ストライキに入ったのだ。今になってポンピドーの演説の真意がわかる。1000人ほどの学生がブローニュ＝ピアンクール工場に出かけていった。（17日夜）

西川はここまでまとめ第1信として東京に送ったが、『展望』8月号の原稿締め切りまでには、まだ日数がある。こうして以後、第2信から第6信まで、追記を含め、ほとんど毎日書き続けた。それらに付されたタイトルは「続発するスト」「オデオン座での討議」（5月20日まで・第2信）、「この革命はすばらしい」「サルトルの発言」（5月21日夜まで・第3信）、「激突」「道が赤く燃えている」（5月25日夜まで・第4信）、「新しい政治勢力の誕生」（5月28日・第5信）、「見せつけられた“政治”」「内面に起こった変革」「インターナショナリズム」（6月8日まで・第6信）である。

混乱が続く5月25日、西川は午後ひと眠りしてからカルチエ・ラタンに出向く。トランジスター・ラジオを持ち歩くのは忘れない。街に出てまず目にはいるのは、ストライキ続きで街路にあふれるごみの山である。メトロ、バス、タクシーは動いていない。カルチエ・ラタンからセーヌ川を渡り、リヴォリ通りに出る。バスチユ広場に向かうその通りは、いつもならシ

ヨーウインドーが輝いているはずなのに、よるい戸が下りていた。人通りはまばらだ。パリ市庁舎の周辺には治安警官が詰めている。バスチーユの数百メートル前から20台ほど警察車が一行縦隊に配置されている。彼は思い切って横を通りバスチーユに抜けようとするが、警官隊の厚い壁にさえぎられて身動きがとれない。大きく迂回し広場にもぐりこもうとしていると、足元で突然、催涙弾がはじけた。遠くでも一斉に炸裂音が響く。群衆がいきなり走り出す。投石も始まらないのに、なぜ警官隊が行動を開始したのか。わからない。だれかが「敷石をはがせ」と叫んでいる。トランジスター・ラジオに耳を当てると、デモ隊がリヨン駅とバスチーユの間で包囲され、バリケードを築きはじめている。バスチーユのあたりでは火災が発生しているという。彼はデモ本体への合流をあきらめ、裏通りを抜けてカルチエ・ラタンに引き返しはじめた・・・

熱い日の連続だった。「パリ・1968年5月の記録」には、上記のような生々しい事件のほかには哲学者サルトルとの討論集会、学生たちによるオデオン座占拠など数々のエピソードが織りこまれているが、この間、西川は写真も数多く撮っている。私はこの原稿執筆を思い立ったとき、写真の一部を見せてもらった。その中の一枚に、学生たちが投石のために路面から剥ぎとり積み上げた敷石を写したものがあつた。敷石の手前にはコンクリートの大きなかたまりがついた鉄柵の一部が放置されていて、それが縦位置でクローズアップされている。その向こうに敷石の山、鉄柵があり、背後に学生たちが鉄柵によって敷石の山から隔てられて小さく写っている。そのワンカットを撮るために西川は、学生の群れから離れシャッターを切った。

剥ぎとられた敷石の山、鉄柵、学生をワンショットにおさめたその写真は彼が事件の「観察者」でもあつた事実を示した瞬間であつたように私には思われる。「パリ・1968年5月の記録」を読み、一連の写真を見ていると、そこに学生の一員としてデモや討論集会に参加し「革命」に共感をしめず顔のほかに、「自分の目で確かめたかぎりでのソルボンヌの様子を、なるべく客観的に記したいと思う」(第1信 だれもが判断を誤った)西川の「観察者」としての顔が鮮明に浮かび上がってくる。

「5月革命」は、ポンピドー政権が共産党や既成の労組を取り込んで結んだ27日のグルネル協定でその流れを変えた。30日のドゴール大統領・テレビ演説が追い討ちをかけた。大統領は「もし危機がこのまま続けば、非常大権の発動もありうる」と左翼との対決姿勢を示し、議会解散に踏み切る。この決断が、6月30日の第二回投票で与党に圧勝をもたらした。『展望』8月号に掲載された一連の手記の最後(6月13日付け)は次ように締めくくられている。

「ドゴール政権はいよいよファシストの様相を表面に出してきたと思う」

P・S 今朝オデオン座が警察の手に落ちた。屋上にひるがえっていた赤旗と黒旗は直ちに三色旗に変えられたという。(午前11時のラジオ放送, 6月13日)

「パリ・1968年5月の記録」は、一つの時代の激動を、日本人の目でとらえ、事件と同時進行で描いた稀有のドキュメントだ。日本の新聞社は5月8日以降の紙面で事件をとりあげ報道するようになるが、一方で「パリ和平会談」に気をとられ、事件の本質に真に迫るには長い時間を必要とした。5月7日にデモが右岸の目抜き通りシャンゼリゼにまで拡大し、学生たちがエトワール広場の凱旋門を占拠するにおよび、朝日と読売が掲載した最初の記事はUPI、AFPといずれも外国通信社配信ニュースの翻訳であった。

朝日新聞がパリ在住の哲学者森有正（当時・パリ大学東洋言語学院講師）の分析を借りて、「揺らくフランス」「『戦後』が終わったしるし 社会の固定化に疎外感」という本格的な記事を文化面に掲載したのは、5月30日（夕刊）である。

＊

私は「パリ・1968年5月の記録」を、人文書院によって刊行された『フランスの解体？もうひとつの国民国家論』ではじめて知った。それを読んで私自身のエッセー「68年5月のころ」を書こうと思い立ったのだった。68年当時、私は「パリ・1968年5月の記録」の存在を知らなかった。

当時、東京でパリの「さわぎ」を新聞やテレビで追いながら、私は複雑な思いだった。私自身パリに留学していた66年から67年秋まで、「5月革命の兆候を感じ取ったときが果たしてあったらどうか」、そう自問する日々であった。中国の「文化大革命」が学生の関心を集めていたのは確かである。赤表紙の小冊子「毛語録」が売っていた。私が通っていた新聞記者養成校（Centre du Formation des Journalistes）の授業でも話題になった。フランス人ジャーナリストK・S・カロルが「文革」さなかの中国を2万5000キロにわたり旅し、現地の取材と中国要人とのインタビューで綴った『毛沢東の中国』が超ベストセラーとなる。それが67年1月であり、私は安ホテルの一室で、何日もかけてそれを読んだ。あこがれのパリにいながら「文革」をじっと見つめ、考えていた奇妙な日々。新聞や本を読んでいると、「文革」の主役江青女史の演説がじかに聞こえてくる錯覚におちいるときがあった。

同志、紅衛兵の皆さん、こんにちは。私は皆さんに革命的プロレタリアートのあいさつを送ります。（熱烈な拍手）毛主席は、あなた方一人ひとりのことに気を配っておられます。（万雷の拍手。詰めかけた群衆の間から、毛主席万歳！と叫びが上がる）私は皆さんが、毛主席を理解してくれるものと信じます。（熱烈な拍手）・・・毛主席があなた方を理解しているように（拍手がいつまでも鳴りやまない）私はとるに足りない人間です。すぐれたところなど何もありません。中国共産党の一員にすぎません。もし、皆さんが私を評価して下さるとしたら、それは私の国家への献身であろうと考えます。献身は私の義務であります（拍手）もし私が過ちをお

かせば、あるいは不正な行動をとれば、あなた方には私を批判する権利があるのです（群集から叫び声。文化大革命を推進する指導者の方針を断固支持しよう！）。

（66年12月17日江青女史の演説 拙著『特派員も眼』から引用・筆者訳）

西川は「パリ・1968年5月の記録」のなかで書いている。「ソルボンヌの開講式の日（67年11月9日）のことを書き送ったと思う。今から思うとあの開講式は象徴的だった。すでにこの事件の萌芽を含んでいたともいえよう」と。（発端から「市街戦」まで・第1信）。大講堂のひな壇に伝統のきらびやかな服装で立ち並ぶ教授たち、大統領や大臣その他の来賓が列席してパリ大学の権威を誇示する厳粛荘重な儀式を一度は見ておこうと出かけた彼が見たものは、ソルボンヌの周囲を固めたおびたしい数の武装警官であった。一般学生は大学に近いスフロ通りUNEF（全学連）本部の前で大学制度の改革を求め抗議集会を開いていた。

彼には、カルチエ・ラタンに記された「壁の言葉」の記憶もある。自発性、創造性、生。これらの言葉は67年11月、彼がパリに着いたとき、すでに公共建物の壁に書きなぐられていた。「5月革命」を特徴づける要素のひとつが、学生たちによって壁にしたためられたおびたしい「壁の言葉」である。学生たちはデモと平行して「壁に言葉を残す」という行為を通して、60年代の奇跡の経済的成長で実現した利潤優先の消費社会、伝統が支配する既存体制への「異議申し立て」をしたのだ。

最初わたしはおもしろいと思ったが、それ以上に考えはしなかった。現実起こった5月の事件がこの言葉に光を与えたのである。この予言的な言葉は事件の最中にあらためてとりあげられるとともに、そのさまざまなヴァリエーションが壁の上に現れる。

ここに自発性がある。 Ici, on spontane .

創造せよ。 Créez .

むしろ生を！ Plutôt la vie .

われわれは生きたいのだ。 Nous voulons vivre .

（「1968年5月 壁の言葉」）

67年10月にフランスを去った私の帰国の時期と西川のパリ到着はほぼ重なり、この一点で二人のパリ時間はつながっている。だが、私に「壁の言葉」や、当時すでにはじまっていたという学生たちの抗議集会の記憶はない。67年のパリで記憶にあるもうひとつの事件は、6月5日に勃発した第3次中東戦争である。「6日戦争」と呼ばれるその戦いでは、文字通り6日でイスラエルがアラブ諸国に圧勝、交戦国エジプトからシナイ半島とガザ地区、ヨルダンから東エルサレムとヨルダン川西岸、シリアからゴラン高原を占領地として奪取した。カルチエ・ラ

タンに接するリュクサンブール公園のベンチで肩を寄せあい、仏紙ルモンドを読みながら泣くむ男女学生の姿が脳裏に焼きついている。二人はアラブ地域からの留学生であであった。この戦争を契機に中東の軍事・政治地図は一変し、紛争の大きな火種を残すことになる。10年後、パリ特派員となった私は中東和平交渉の取材でたびたびイスラエルまで飛び、シナイ半島やゴラン高原のルポを書いた。「6日戦争」には格別の想いがある。70年以降のベトナム、67年10月にフランスから帰国したのち3年目に特派員として派遣されつづさに見た戦時下のサイゴンの模様についても同様である。しかし、ここでそれらを詳細に書くだけの紙幅はない。

*

私にとって「5月革命」とは何だったのだろうか。いまでも自問するときがある。68年当時、東京で事件の展開を見守りながら、パリで過ごした日々を想った。その後、私は戦時下のサイゴン特派員³⁾を経て、74年に今度は特派員としてパリに戻り⁴⁾、77年8月に「“5月革命”の未裔たち」という記事を書くことになる。当時、仏週刊誌ル・ポアンが「マルクスは死んだ」というタイトルのもと特集を組み、ヌーボー・フィロゾフ（新哲学派）と呼ばれる一群の若い哲学者たちをとりあげたことがある。他の雑誌や新聞も同工の記事を掲載した。私はそれらを紹介するかたちで、「5月革命」を見つめなおした。「5月革命」を私がまともに文字にしたのは、このときがはじめてである。

「5月革命」の流れをくむ二つの若い世代が、いまフランスで脚光を浴びている。ひとつはマルクス主義に反旗をひるがえした“新哲学派”。もうひとつは商業用高速増殖炉「スーパー・フェニックス」建設に反対する環境保護派の若者である。/『5月革命』の最中、私はラジオを片手にパリの地図をひざの上において、バリケード戦の展開を追っていた。新哲学派の旗手と呼ばれるベルナル＝アンリ・レビの回想だ。彼が書いた『人間の顔をした野蛮』は、春に発売されるとたちまち3万部を売りつくした。哲学書としては異例の売れ行きだ。新哲学派という流行語は彼がつくった。/「結局、なにが起きているのかよくわからなかったが」と半分冗談めかしてレビは68年の事件を振り返っているが、この事件は彼の哲学に決定的な意味を持つ。/「68年5月。それは社会主義の歴史のなかでももっとも暗い日々のひとつである」/『天使』でベストセラーを当てたギー・ラルドローとクリスチャン・ジャンベも5月にひとつの世界の崩壊を見た。二人ともエリート養成校パリ高等師範の学生であり活動家だった。『5月革命』を押しつぶしたのはドゴール体制下の警察権力ではない。共産党と既成の労働組合こそ責任を負うべきだ。この認識は他の新哲学派にも共通する。彼らは自らを、68年5月に裏切られた子供たち という…（後略）（読売新聞 77年8月26日）

私は上記の記事を書くにあたって、新哲学派の“長男”といわれたアンドレ・グルックスマ

ン（当時40歳）に合って話を聞いている。バスチーユ広場に近いパリ11区の自宅を訪ねた。両親はともにドイツ系ユダヤ人で、彼は56年のハンガリー動乱を戦車で押しつぶしたソ連に幻滅し、フランス共産党から脱党した経歴の持主であった。68年当時は新左翼マオイスト（毛沢東派）のグループと行動をともにしたというが、取材した当時の中国には批判的だった。著作『大思想家たち』は、マルクスやヘーゲルといった巨匠たちが内包する「全体主義の思想」を暴いたものとして評価されている。

グルックスマンの説明によると、「5月革命」のあと活動家たちは大別して三つの道を行っていた。大学に残りマルクス学者として出世主義に走った者。暴力主義に落ちた者。彼の場合がそうだが、新しい労働運動に飛び込み指導しようとした者たち。しかし、リップ工場の争議⁵⁾指導に乗り込んでみると、大衆・労働者の方がはるかに創造的で、彼自身は後衛にすぎないと思知らされた。68年のルノー工場での労働者の闘いこそ「五月の思想」が開花した稀有な例だとグルックスマンは熱っぽく語った。あのと時の争議の中核は、共産党でも労働総同盟（CGT）でもなく、スト権を持たない未熟練労働者や移民労働者だったという。彼らはそれまでの労働争議の常識をやぶる闘いを組織した。またグルックスマンは、77年7月末に仏中部のクレイ・マルビルで展開された若者たちの高速増殖炉「スーパー・フェニックス」の建設反対運動は、アメリカにおけるかつてのベトナム反戦運動に匹敵すると評価した。

あとき彼が指摘した建設反対運動では、7月31日の建設地周辺デモで学生1人が死亡した。そして97年6月の総選挙で勝利した社会党を軸にした左翼政権は、「スーパー・フェニックス」計画の放棄を決め、今日にいたっている。

＊

「壁の言葉」を収録した『フランスの解体？ もうひとつの国民国家論』には、「1968年5月 壁の言葉」というタイトルの章が別に設けられている。編集者に「パリ・1968年5月の記録」と対比させる意図があったのだろう。そしてそこに新たな（まえがき）が書き加えられた。「壁の言葉」の初出は『立命館言語文化研究』（1998年9巻第4号）である。「5月革命」から30周年にあたる時であった。西川はその（まえがき）の冒頭に「10年前の1988年、つまり『5月革命』20周年の年にはフランスでは30冊ほどの5月革命論が出版されたということであるが、30周年の1998年はどうだろうか。1988年と同様、フランスではかなりの量の5月革命論が出版されて、日本のジャーナリズムはほとんどそれについて無関心にすごすであろう、ということが予想される」と書き、さらに

1988年にはわが国では少なくとも雑誌『思想』（11月号）が「思想空間の変容1968 - 1988」

という、それだけ読めば一見5月革命論とはわからぬようなタイトルで特集を組んでいる。1998年の場合も『朝日新聞』が「'68 / '98の視線，地球市民はいま」という見出しの、なかなか興味深い連載記事を年末からのせているが、その記事から1968年の5月革命について改めて考えてみようとする人は、おそらく少ないだろう。1968年はいまの学生や若者たちが生まれる以前の事件なのだから。

と続けている。私も同感だ。そして、いまこの（まえがき）を読んではじめて知った驚き。それは「以下の章に納めた5月革命の壁の言葉にかんする文章は、『1968年7月18日パリ』という日付が語っているように、5 - 6月事件の直後にパリで書かれている。この文章は日本に送られた『パリ・1968年5月の記録』の続編として『展望』に掲載されることになっていたが、68年8月、プラハの春で知られていたチェコスロバキアに対するソ連軍の軍事介入という大事件があって、編集方針が変わり、結局掲載されなかった。今回、ほぼ30年前に書かれ、途中まで編集者の朱が入っている色あせた原稿を筐底から取りだして発表する決心をするまでには、かなり躊躇があった」という事実である。私は「壁の言葉」も「パリ・1968年5月の記録」も『フランスの解体？ もうひとつの国民国家論』で読んだが、いま、はじめて「5月革命」の実態を知る多くの若い人にとっても、これは貴重な本になるはずだ。30年前に書かれた「壁の言葉」や「記録」である。たとえそうであっても、それが「色あせてしまう」ことは決してあるまい。

西川は「壁の言葉」のなかで、「『5月革命』はなによりも学生によっておし進められた運動であった。既成の左翼政党や労働組合の指導部の硬化症的な反発にもかかわらず、あの運動があれほど多くの労働者を動かし、あれほど多くの労働者との連帯に成功しえたのは何故だろう？」と自問しながら、「抑圧され潜在化した不満と欲求は革命的な状況のなかで出口を与えられ、革命的な行為のなかで意識化され、明確とはいえないまでも一定の形をとりはじめた。わたしはそこに『5月革命』の真の意味を認めたいと思う」と書いた。

また新たに書き加えた（まえがき）でも、「いま思うと、それは私にとって、フランスの歴史や文学に対する見方を根底から変えただけでなく、私の生き方を根底からくつがえすような決定的な事件であった」と記している。それでいて彼は、「30年後の1998年には、また新しい角度から『5月革命』が論じられるだろう」と述べ、「この文章を書きながら5月革命についての納得のゆく説明は結局ありえないということに思い至った」とひとつの結論を下している。

「5月革命」という巨大な命題への完全な回答は、まだ出ていないといえる。そんなとき西川が立ち戻るのは、あの5月の日々であり、壁に見いだした「言葉」の数々であり、彼が「記録」した事実へであろう。

30年という時間の流れは、私にとっても断ち切れるものではない。世界で同時多発的に起きた若者たちの「反乱」、80年以降の東欧激動の遠い予兆だった「プラハの春」とソ連軍の戦車による圧殺。そうした事件があいついだ68年という特異な時間は、それ以後過ごしたベトナムやパリでの記憶と重なって、いまも、いくつもの波状をえがきながら私のもとに打ち寄せてくる。パリの「5月革命」は、それ以後の世界を理解し解釈するうえで、私にとっても決定的な意味を持ち、思考のひとつの出発点となっていることに思っていたのだ。

注

- 1) 4月3日、ハノイとワシントン間で「接触の樹立」について原則合意が成立、接触の場所について「北」はパリを提案していた。
- 2) パリ大学ナンテールの学生。3月に結成された「3月22日運動」の代表で、「5月革命」でも指導者としてその言動が注目される。
- 3) 70年5月から72年8月まで常駐特派員。その後、ベトナム和平協定調印へと事態が急展開した同年12月に再びベトナムにもどり、現地状況を応援取材した。和平協定がパリで調印されたのは、73年1月27日、停戦発効は翌28日午前8時（サイゴン時間）。
- 4) 75年4月30日、サイゴンは北ベトナム正規軍の進撃で陥落した。68年5月のパリ和平予備会談から回を重ね、73年1月に調印にこぎつけた「和平協定」はこうして破棄された。私はこの劇的なとき特派員としてパリに駐在しており、そこでのベトナム人社会の反響を東京に書き送っている。
- 5) 倒産後、労働者が工場を自主管理したことで知られる。

(Hiroshi Ozora, 本学部教授)